



沼の貴婦人

～ロドリー村より～

浜田 薫

ホーリーの沼には、悲しい恋の物語が沈んでいる――。

エマがその昔話を初めて聞いたのは、まだ祖母が健在だった頃。
つまり彼女が、うんと小さい頃だった。

(1)

気泡の入った分厚い窓ガラスを通して、夏の午後の日差しが机の上を明るく照らしていた。

夏と言えど、ここロドリーではその日差しはけして強過ぎるものではない。南の大陸の人間ならば、昼間であっても多少肌寒いと感じるかもしれない。しかし、彼らと違い、ジリジリと焦げつくように照りつける太陽というものを知らないロドリー育ちのエマには、その日差しは充分すぎるほど暖かく、また、単語の書き取りという退屈な作業中であっては、どうしようもなく心地よい眠気を誘うものでもあった。

それは何もエマだけでなく、教室にいる他の子たちも同じだった。男の子の中には、牧師先生が最前列に座っている六歳のアイリーンに文法を教えるのにかかりきりになっているのをいいことに、堂々と居眠りをしている子もいる。エマの隣に座っているジョンも、本を机に立てて、先生の注意を引かない程度の音量で飛び交うひそひそ話や忍び笑いを子守歌に、すっかり夢の世界だ。

エマはそれを羨ましがりにちょっと横目で見て、もう何度目か分からない欠伸を小さく噛み殺した。

「ねえ」

ひとつ前の席に座るマリエッタが囁き声でそう話しかけてきた時、エマはもはや半分眠りかけた状態で、判読不明のミミズのような字を石板の上に増やしているところだった。

「私とベラ、今夜、ホーリーの沼に行ってみようと思うんだけど、エマたちも行かない？」

「へ？」

興奮気味のマリエッタのその言葉に、エマはとろんとした目を思わず瞬かせた。

それとほぼ同じに、マリエッタの隣に座ってるベラもまた、通路を挟んで横のリーシャに向かって小さく声を飛ばす。

「ねえ、行こうよ。リーシャも」

「え、なに？」

「ホーリーの沼。今夜、満月でしょ。蓮の花も咲いてるはずだわ」

顔を上げ問い返したリーシャに、マリエッタが小声ながら弾んだ調子で答える。

エマは、一瞬リーシャと顔を見合わせ、それから、マリエッタとベラに向きなおった。その時にはもう、エマの眠気は飛んでいた。

「行くってあんた達、そんな夜中に外出していいの？ おばさん達、よく許してくれたわね」

「まさか。黙ってこっそり抜け出すのよ。寝たふりして、お母さん達が寝静まった頃に、窓からこっそり出ちゃえば分からないわ」

「ええ。それ、バレたら、ものすごく怒られない？」

目を丸くするリーシャに、マリエッタは肩を竦めてみせる。

「バレたら、ね。バレなきゃ平気よ」

「ねえ、行こうよ。二人だけだとやっぱり、ちょっと心細いし。それにあんた達だって、運命の人の顔、見てみたいと思わない？」

「そりゃあ、見られるものなら見てみたいとは思うけど……」

強請るようなベラの誘い文句に、エマは心惹かれながらも躊躇った。

エマとて好奇心がないわけではない。しかし、真夜中に家を黙って抜け出して、もし見つかったら、どんなお仕置きが待っているか分からない。怒った両親に一週間の外出禁止令など出されたら、せつかくの短

い夏が終わってしまう。その危険を考えると、いくら好奇心を掻かれようとも、おいそれと返事は出来ない誘いだっただ。

リーシャも同じらしく、再び見合わせた顔は、互いに思案顔だった。と、その時、リーシャの後ろの席のトーマスが、突然会話に入ってきた。

「馬鹿だなあ、お前ら。まだそんなおとぎ話、本気で信じてるのかよ」

「なによ、あんたは誘ってないわ。黙っててよ」

明らかに軽蔑が混じったその口調に、マリエッタがむっとして声を尖らす。

トーマスは気にせず、したり顔の呆れ顔で、女の子たちを見回した。

「沼の貴婦人（レディ）なんているわけないじゃん。大体俺、あの沼で散々ザリガニ釣りしてるけど、一回も幽霊なんて見たことないぜ？」

「それは、朝とか夕方の話でしょう？ 貴婦人が姿を見せるのは、蓮の花が咲く季節の満月の晩、それも真夜中って決まってるの」

「そうじゃなくたって、あんたみたいなガサツな奴の前に、貴婦人は姿見せないでしょうけどね」

小さな弟に言って聞かすような口ぶりで意見したリーシャに続いて、ベラがつっけんどんにぴしゃりと言う。

トーマスはわざとらしく肩を竦めると、嘲るような半笑いをしてみせた。

「女って本当、どうしようもねえな。ま、せいぜい幽霊に沼に引きずり込まれないように気をつけるこった。ああ、その前に、家の人に見つかって尻叩かれないようにしろよ。女はどんくさいからな」

「いやな奴」

ベラはそんなトーマスに睨みの一瞥をくれると、半ば懇願するような表情で、エマとリーシャに向き直った。

「ねえ、行くでしょ？ 大丈夫よ、そうそうバレることなんてないわ。音を立てないように、静かに行動すれば大丈夫だって」

「そうよ。ねえ、一緒に行こう？」

マリエッタもまた、頷くように言う。

エマは不安は多少あったものの、好奇心には抗えず、また、トーマスの女の子を馬鹿にしきった態度に腹が立ったことも大きく関係して、再度リーシャと顔を見合わせると、「いいわ」と、頷いたのだった。

ホーリーの沼に纏わる伝説は、ロドリーでは有名な昔話が元となっている。

その昔、身分の違いで引き裂かれた男女が、駆け落ちすべく、ホーリーの沼で待ち合わせていた。

しかし、約束の夜、沼で待つ女性の元に恋人が現れることはなかった。彼は女性のもとへ向かう途中、駆け落ちの計画を知った恋敵の男性に刺され、命尽きてしまっていたのだ。

それを知り悲嘆にくれた女性は、そのまま沼の底深くに身を沈め、二度と戻らなかった。

その女性の悲しい魂が沼に留まり、今でも蓮の花が咲く季節の満月の晩になると、恋人を待ち続けて、沼の上にぼうっと白い靄のように佇む女性の姿が見られるという。

これだけなら、古い典型的な幽霊話に過ぎないのだが、エマたちの好奇心を擽ってやまないのは、その話に付随した伝説のほうだ。

蓮の花が咲く季節の満月の晩、その女性——沼の貴婦人が現れるとされる深夜に沼を覗きこむと、自分の運命の相手、つまり将来の伴侶の顔を見ることが出来るとされているのだ。

いつの時代に生まれたものか、ひいてはその根拠も真偽も定かではないが、それはロドリーの人たちの間で、特に恋に恋する年頃の、ちょうどエマたちくらいの少女の間で代々に渡って、伝説として実しやかに囁かれ続けてきたもので、村の十歳以上の子供なら誰でも知っている伝説だった。

「でも、実際に行って本当に見たことがある人、いるのかしら？」

教会からの帰り道、リーシャが教科書を胸に歩きながら言った。

日はまだ高く、薄い水色の彼方にそびえ立つグライニエ山の輪郭がくっきりと見える。轍が残る赤土むき出しの道は、荷馬車が通るでもなければ土埃を舞上げるわけでもなく、平穩そのものだ。

エマは、右手にあるキンスリーさんの牧場の丘から吹き下りてくる風になびく後れ毛を、邪魔そうに耳にかけながら口を開いた。

「私のお祖母ちゃんは行ったらしいわ」

「うそ、本当に！？」

牧場と道を隔てる石詰みの塀の上をバランスを取り取り歩いていたマリエッタが、エマの発言に、黄色い声を上げて道に飛び降りる。

「それで、どうだったって！？」

「お祖母ちゃん、お祖父ちゃんの顔が見えたって」

「ええ、すごい！」

手を組み合わせて目をキラキラさせるマリエッタに、エマは軽く苦笑した。

「でも本当かどうか分からないわ。その時お祖父ちゃんも一緒にいたし、二人とも可笑しそうに笑ってたから、私をからかっていたのかも」

言いながらその頃を思い出して、エマはほんの少しだけ、顔を俯けた。その腕に、左横を歩いていたリーシャの腕がそっと絡まる。

「エマの家のお爺ちゃんとお婆ちゃん、すごく仲が良かったものね。私、覚えている。本当に運命の相手だったのよ」

「きっとそうよ。いいなあ、運命の相手と添い遂げるなんて、憧れちゃう」

リーシャに続いて、エマの斜め前を歩いていたベラも振り返って言う。

そして、その目に悪戯な色を乗せるとリーシャに向けた。

「リーシャは、ジョンの顔が見えるんじゃない？」

「え、ジョン？ どうして？」

エマの腕に腕を絡めたまま、リーシャがきよとんとして目を瞬く。エマも同じようにきよとんとして、ベラを見やった。ベラはますます、悪戯っぽく目を細めた。

「しらばっくれちゃって。私、見たんだからね。リーシャ、この前、コレルさんの工房でジョンにクッキー渡してたでしょ。ちょっと意外だったけど、あんた達、なかなかお似合いだと思うわ」

「へえ、知らなかった。そうなの、リーシャ？」

エマは少し驚いて、リーシャを見た。

ジョンがどうこうではなく、小さい頃からずっと一緒に何でも知っていると思っていた友人の、初めて聞く行動に純粹に驚いたのだ。

しかし、リーシャは心外だと言わんばかりに、口端を下げて返した。

「やあね、変なこと言わないでよ。あれはお礼よ。この前、私の不注意でパックが川で溺れそうになったのをジョンが助けてくれたの。クッキーはそのお礼として、お母さんと一緒に作ったの」

「なんだ。私てつきり、二人は恋人になったんだって思ってたのに」

「やめてよ、クッキーくらいで、そんな。大体、まだ早いわ、そういうの」

面白くなさそうに肩を落としたベラを、リーシャが軽く睨む。

そんなリーシャをエマの横から顔を出して覗きながら、マリエッタが意見する。

「何言ってるのよ。私たち、来年には十五になるのよ。恋人が出来たっておかしくない年だわ。リーシャは背も高いし、綺麗だし、私たちの中で一番先に恋人が出来るとは思えないかしら」

「そうね。この前の舞踏会でも、リーシャのこと気にしてる人、私も結構見たわ。リドルのアルフレッドだけ、あの人もリーシャのこと誘いたそうにずっと見てたのよ」

エマは先週の生誕祭の夜のことを思い出し、マリエッタに同意の声をあげながら、リーシャを見た。

「なのにリーシャったら、彼が近づいてきた途端、恥ずかしがって逃げちゃうんだもの。ちょっと可哀想だったわ」

「ええ、そうなの？ アルフレッドって、あの黒髪の背の高い人？ やだ、リーシャってば何で逃げたりしたのよ。あの人は別にどこの誰とも知らないってわけじゃないし、踊ったって別に問題ないじゃない」

エマとマリエッタ二人の視線を受け、リーシャが頬を赤くして、困ったように下を向く。

「だって、踊ったらお話しなきゃでしょ？ ロドリーの人なら慣れてるから平気だけど、アルフレッドなんて口をきいたこともないのよ？ 年上だし、何話したらいいのか分からないし、咄嗟に体が逃げちゃったんだもの、仕方ないじゃない」

「話すことなんて適当でいいのよ。いい晩ですねとか、そんなので。ああ、勿体無い。私なら喜んで踊ったのに」

心底残念そうな声をあげたマリエッタに対し、ベラが澄まし顔でからかうように言う。

「マリエッタはでも、あれでしょ。舞踏会にいらしてた貴族の若様みたいなハンサムがお好みなんですよ」

「ええ？ 貴族の若様って、ハランドさんの坊ちゃまのこと？」

ハランド家の御子息の顔を思い出しながら、ハンサムだったかしらと、エマはちょっと失礼なことを考えた。エマのそんな思考を見透かしたように、ベラが笑って首を横に振る。

「違う違う。ほら、坊ちゃまが連れていらしてたご学友の、」

「ちょっとベラ、やめてよ。私が面食いのお馬鹿さんみたいじゃないの」

「あら、違ったの？」

「もう」

マリエッタは、小憎たらしい表情を浮かべて笑うベラを軽く小突いてから、言い訳するように口を窄ませた。

「確かにあの若様はすごくハンサムだったし、あんな人にダンス申し込まれたら、素敵だろうなって思ったわ。だけど、貴族の若様なんて所詮雲の上の人じゃない。いくら私だって、そこまで身の程知らずじゃないわよ」

「でも、出来たら、運命の相手はハンサムな人のほうがいいでしょ？」

「そりゃあ、だって。みんなだってそうでしょ？」

ベラの淀みない追撃に、マリエッタは素直に言葉を詰まらせ、探るように友人の顔を見回した。

エマたちは自分に回った思わぬ矛先に、マリエッタ含む全員で顔を見合わせ、それから揃って軽く吹き出した。

「まあ、今晚分かるわよ。沼の貴婦人が教えてくれるわ」

「そうね。なんだか、ドキドキしてきた。何時にどこで落ち合う？」

「ホーリーの沼まで一時間かかるとして、十時に四辻は？」

「四辻はだめよ。誰かに見られるかもしれないわ。三連水車の近くの薪小屋にしましょ。あそこなら、夜は誰も来ないはずよ」

「分かったわ。十時に薪小屋ね。みんな、眠っちゃいやよ？」

「大丈夫よ、緊張して眠れっこないわ」

「じゃあ、指切り」

最後にベラが言って、四人は小指を絡めた。そして、四辻まで来ると、それぞれ期待と不安に浮き足立ちながらも、いつものように別れて家路についた。

エマはその夜、抱えた小さな秘密にそわそわして、始終落ち着かなかった。

そんなはずはないのだが、母親や父親と目が合うたびに、今夜の企みが既に見抜かれているような気がしてならなかったのだ。そのせいで、普通に振舞おうと思えば思うと、些細な会話の受け答えまで微妙にぎこちなくなってしまうた。

しかし、エマの不安を他所に、時間はいつもどおり流れた。

いつもの時間になって、両親におやすみなさいのキスをするとき、エマはちくりと良心が痛むのを感じずにはいられなかった。だが、それ以上に、これから自分がする行為に対する緊張感のほうが大きく、エマは胸をドキドキさせながら、自分の部屋のベッドの中でその時を待った。

やがて、すっかり寝支度を整えた母親が、ランプ片手に部屋を覗きにきた。

エマは壁の方を向いて、必死に眠っているふりをした。母親はエマの掛け布団を少し直すと、疑うことなく部屋を出ていく。エマはほっとして、思わず安堵の息をついた。

それから間もなくして、家のどこからも音が聞こえなくなった。

エマは充分待ってから、そっとベッドから抜け出した。音を立てないように素早く、寝間着からいつもの服に着替え、慎重に慎重に、ドアを開ける。

エマの部屋は二階で、窓の近くには足場となる木もないため、外に出るにはどうしても一階に降りなくてはならない。軋む床や階段に何度も肝を冷やしながらも、エマは何とか、台所の勝手口まで無事たどり着いた。

(ごめんなさい)

勝手口のドアノブをそろりと回しながら、エマは、何も知らずに眠る両親を思って心の中で謝った。ドアを開けて出ていこうとする自分が、とても親不孝な悪い娘のように思えて、気が引けた。

しかし、それも一時のこと。

そっと開けたドアを同じくそっと閉めて、足音に気をつけながら二、三步家から離れた後は、エマの心は、しんと静まった夜の空気がもたらす不思議な高揚感で一杯になっていた。

紺紫のビロードのような空に浮かぶ白金の月には、その形を縁どるように丸い光の輪がかかっており、夜道は家の中よりも明るいほどだった。常に村を見下ろしているグライニエの輪郭も、縫い取られたようにはっきり見える。

小川に近づくにつれて増えていく虫の声に、エマは足を急がせた。

十時という約束だったが、エマの家では時計は居間に一つあるだけで、それを確かめてくるような余裕もなかったことから、今が何時なのかエマには知る術がなかった。とはいえ、時計が家に一個しかないのはどこの家でも大抵そうで、だからきっとみんなも自分と同じで、大体で行動しているだろうというのは分かっていたが。

三連水車の影が見えて、薪小屋が視界に入った。注意深く辺りを見回しながら小屋に近づくエマに、すぐに忍び声が飛ぶ。

「エマ、こっちよ」

その声にエマは安堵して小屋の裏手に回った。

そこには、昼間と変わらないベラとリーシャの姿があった。

「誰にも見つからなかった？」

「うん、大丈夫だと思う」

再会を喜ぶようにお互いに手を取りあいながら、エマは答え、もう一人の姿を探した。

「マリエッタは？」

「それがまだなのよ」

ベラが気遣わしげにそう言った時、ちょうどよくマリエッタも到着した。

「遅かったじゃないの」

「ごめん、アンリが今日に限ってなかなか寝付かなかったのよ」

ベラの言葉に、同室の妹に文句を言うように答えて、マリエッタがみんなを見回す。

「みんなよく出てこられたわね。家の人に怪しまれなかった？」

「分からないわ。多分大丈夫だと思うけど、私、どうしてもぎこちなくなっちゃって」

「私もよ。家を出る時なんて、なんだかすごく悪いことをしてる気がしてたまらなかったわ」

不安そうに眉尻を下げたリーシャに同意して、エマはその手を握った。

それを見て、ベラが澄まして言う。

「あら、実際に悪いことしてるのよ」

「何よ、自分が誘ったんじゃないの」

エマが思わず睨むと、ベラはちよろっと舌を出して笑い、肩を竦めた。

「だって、やっぱりこういうことは、みんな一緒がいいでしょ？ 良いことも悪いことも、これまでずっと一緒だったんだもの」

「そうよ。そして、これからね。何があっても私たちは一緒よ」

「天の門で女神様に許しを請う時も？」

ベラとマリエッタの意見に、リーシャが、幼い日の古い誓いの言葉を持ち出して、全員で顔を覗き込み合う。途端、それぞれの口元に笑みが浮かんだ。くすくすという笑い声が誰の口からも漏れて、気を取り直すようにベラが先頭を切った。

「さあ、誰かに見つかる前に早く移動しましょ。ここまで来たんだもの。何が何でも、貴婦人に運命の相手の顔を教えてもらわなきゃ」

梟の低い声が、エゾマツの林に厳かな雰囲気響き渡る。

ひんやりと肌を舐める夜風に、露に濡れたシダの香りが匂い立つようだった。

ロドリーとナーダを繋ぐ街道から外れ、エマたちは林の中を歩いていた。

ここまで来てしまえば、もう人目を気にする必要もない。所々に柔らかな苔の生えた、ほの暗い小径を前後二組に別れて行きながら、エマたちはもう、ひそひそ声で話すのをやめていた。

「サンドイッチでしょ、カップケーキでしょ、それからスモモの砂糖漬けに、クッキー。パイは出ると思う？」

途中手折ったチコリーの花を耳に飾ったマリエッタが、指で数えるようにして言う。

話題は先程から、週末に教会主催で行われるキンスリー牧場でのピクニックで振舞われるだろうお菓子の話に集中していた。

「パイが出るなら私、レモンパイがいいな」

エマもまた手折ったチコリーの花を指で弄びながら、そう希望を述べたものの、実際のところは口に出す前から、叶わないと分かっていた。

教会主催で行われるこの手の催し物で振舞われるお菓子は、村の婦人会の人たちによって作られ持ち寄られるもので、婦人会というのは村の主婦たち、つまり、エマたちの母親のことだ。普段から何かと忙しい彼女たちに、あまり手の込んだものを作る暇などないことくらい、エマとともう理解している。

そんなエマの腕に自分の腕を絡ませて隣を歩いていたリーシャが、軽く笑って自分の希望を述べる。

「エマは本当、レモンパイが好きね。私はレモンパイより、アイスクリームのほうがいいわ」

「アイスクリームなら大丈夫よ。キンスリーさんの家には攪拌機があるもの。必ず出るはずよ」

ベラが請けあうように力強く言い、「牛もいるしね」と、横からマリエッタも明るく口を挟む。

最初林の中に入ったときは、街道とは違って月光が殆ど射さない周囲の暗さに、エマは内心心細さを覚えたが、こうして四人でいつものように、ひっきりなしに話をしていれば、暗さなど何ということもなかった。

それはみんな同じなようで、林に入った途端、身を寄せるようにがっしりと腕を絡めてきたリーシャも、段々と腕の力を弱めていつもの調子に戻っているし、前を歩くベラやマリエッタの口調も堅さが抜け、明るく快活だ。

そうやって一旦慣れてしまうと、暗さは恐怖や不安を煽るものでなく、むしろ、一種の興奮剤だった。ただでさえ、背徳感や期待感で興奮していた少女たちは今、夜の薄闇の中にあって更に興奮しており、知らず知らずのうちに、みんないつもよりやや饒舌になっていた。

「なんだか、お腹空いちちゃった。何か持って来れば良かった」

「お菓子の話するからよ。私もお腹が空いたわ」

「私もよ。話題を変えましょ。そうね、みんな何色が一番好き？」

「そうねえ。一番となると、やっぱり、ピンクね。大人になったら私、ピンクの更紗の服を一枚作るつもりよ」

「私はピンクはあまり好かないわ。可愛いとは思うけど、私の髪にはあまり似合わないんだもの」

「あら、そんなことないわよ。エマ、自分でいうほど赤毛じゃないわ。それは栗毛っていうのよ」

「髪といえば、私、黒髪に生まれたかった。あんなに艶やかで綺麗なものつたらないと思わない？」

途切れることのないお喋りの中、ふと頭上に目をやったベラが、慌てて口調を変えた。

「いけない、見て。もう月があんなところまで来てる。急ぎましょ、真夜中には沼に着いてなきや」

その言葉に驚いてエマも空を見上げれば、月は確かに中天に近づきつつあった。

「やだ、本当。急ごう。沼まで後どれくらいかしら？」

「そんなに遠くはないはずよ。もう結構歩いたもの」

少し大きめの岩を避けながら、マリエッタが歩調を速めて言う。

その後ろで同じように歩調を速めながら、リーシャが全員に問いかけるように言った。

「ねえ、沼の貴婦人は現れると思う？」

「そりゃあ、現れるんじゃないの？ 満月の晩、蓮の花が咲く季節っていう条件はばっちりなんだし」

「でも…。本当にいるのかしら？ その、だって、貴婦人は……分かるでしょう？」

その微妙に歯切れが悪い物言いに、エマはピンと来た。思わずちよっと笑って、隣合った肩を軽くぶつける。

「リーシャ。あんた、幽霊が怖いんでしょう？」

「だって。みんな、よく平気ね」

不安げに下がった眉尻と同じくらい口端を下げて返すリーシャに、マリエッタが無邪気に言っただけのける。

「あら、だって貴婦人は、女の子には何もしないって昔から言うじゃない。私は是非とも見てみたいわ」

「でも、幽霊なのよ？」

「大丈夫よ、リーシャ」

エマは宥めるように、明るく笑った。

「貴婦人は幽霊じゃなくて沼の妖精だって、お祖母ちゃんが昔言ってたわ。妖精女王の話、小さい頃あんた大好きだったじゃない。あれと同じよ。怖がることないわ」

「エマのいうとおりよ、リーシャ。それに私たちの目的は、運命の相手の顔を見ることであって、貴婦人を見ることじゃないわ。怖かったら、沼の上は見ないで、水面だけ見てればいいのよ」

「そうよ。それでも怖いっていうなら、私も手を握ってあげてあげる」

ベラに続き、マリエッタにも励まされ、リーシャが不安を拭いきれないにしろ一応は頷いたとき、林の向こうに開けた、月明かりが照っている場所が見えた。

「沼だわ！」

洞窟で宝物を見つけた探検家のようにベラが言って、前方を指す。

エマは、月の位置を確かめるべく空を仰いだ。

「どうにか真夜中には間に合ったわね。良かった」

「ねえ、やっぱり怖いわ」

「大丈夫だったら」

早速怖気づくリーシャにみんなと言って返しながらか、高まる鼓動に頬を上気させて、四人は殆ど駆け足で沼へと近づいた。

ホーリーの沼は、周囲をぐるっとエゾマツに囲まれた楕円形の大きな沼だ。土壌が豊かで、蓮や布袋葵などの植物はもちろんのこと、メダカや鯉、ザリガニ、カエルなど様々な生物の住処となっている。

エマたちが沼に着いたとき、折りよく月にかかっていた薄雲が風に剥がれ、白金の月光が、鬱蒼とした林の中にぽっかりと開いた沼地全体を清かに浮かび上がらせた。

エマはその光景に、思わず目的も忘れて、心から酔いしれた。

沼を覆い尽くすような、淡い紫色をした布袋葵に、白い蓮の花。その葉や茎の緑。それらを携え、黒とも紺とも紫とも言えない夜空の色を映す水面。飛び交う虫の羽は月光に銀色に光っている。

その色彩と陰影の美しさといったら、天の国にもし夜というものが存在するなら、きっとこんな感じに違いないと思うほどであった。

「なんて美しいのかしら…」

うっとりして呟いたエマに、マリエッタもまたうっとりした顔で言う。

「本当に…。カエルの声がこんなに詩的に聞こえる場所なんて、他にないわ」

「ちょっとマリエッタ。人が感動してるときに、カエルの話なんてしないでよ。ほら、リーシャ、下ばかり見てないで、ちょっと顔をあげてごらんさい。これを見ないなんて一生の損よ」

カエルが苦手なベラが、夢から現実に連れ戻されたショックに僅かに眉を顰め、エマの腕にしがみついで頑なに顔を下げているリーシャを見る。

「だって。ねえ、貴婦人は？ いるのだったら、私、見ない」

リーシャのその言葉に、エマははっと我に返って、沼の上を目を凝らして見渡した。しかし、月影さやかな沼のどこにも、それらしき姿は見当たらない。

幼い頃に祖母から聞いた美しくも悲しい恋の物語のヒロインである貴婦人に対し、どこか夢見るような気持ちがあったエマは、少しばかりがっかりした。マリエッタではないが、彼女をこの目で見られるものなら是非見たいと、エマも思っていたのだ。

だが、いくら探しても貴婦人らしき影はなく、エマは諦めてリーシャに告げた。

「いないわ」

「本当に？」

「うん」

念押しするリーシャに頷くエマの横で、マリエッタもまた念押しするように、ベラを見やる。

「ねえ、もし貴婦人が姿を見せてくれなくても、真夜中に沼を覗き込めば、運命の相手の顔は見られるのよね？」

「そのはずよ」

緊張気味に答え、ベラは心臓を押さえるように両手を胸に置いた。

「ああ、ドキドキしてきた。ヒキガエルみたいな顔の人が見えたらどうしよう？ いくら運命の相手でも、それだったら私、好きになれないかもしれない」

「まさか。そんなはずないわよ。ああ、でも本当にドキドキする」

「ねえ、どんな顔が見えたって、みんな隠しっこなしょ？」

「もちろんよ」

不安と期待に胸を爆発させんばかりに膨らませ、沼のほとりに並ぶとエマたちは顔を見合わせた。

月はちょうど中天に差し掛かっており、互いの顔をはつきりと見ることが出来た。

「みつつ数えたら、同時に覗き込むのよ。いい？」

「分かったわ」

ひどく真面目な顔で言うベラに、同じく真面目な顔でエマが頷き、マリエッタもリーシャも頷く。

「じゃあ、いくわよ。いーち」

「に一い」

「さんっ！」

声を合わせて数えて、一斉に足元の沼を覗き込む。

その瞬間、エマは無意識のうちに息まで止めていた。

心臓は踊るように跳ね返り、一際大きく鳴った。

しかし、そんな体を震わすような胸のときめきも、一時だけのことだった。

「……………ねえ、何か見えた？」

最初に口を開いたのは、マリエッタだった。

その声に、沼を覗き込んだまま、リーシャが躊躇いがちに答える。

「…私、自分の顔が見えるんだけど、これって自分が運命の相手ってこと？」

「そんなわけないでしょ」

眉を顰めて暗い水面に映る自分を見つめながら、ベラが否定の声をあげる。

エマもまた水面に映る自分の顔をじっと見ながら、言った。

「でも私も、自分の顔しか見えないわ」

誰ともなしに無言になったエマたちを尻目に、沼のあちこちで間延びしたカエルの鳴き声が響く。

飛び回る虫とは反対に、誰もがしつこく、自分の顔が映った沼を覗き込んだまま動かなかった。

エマは、否応なしに冷めていく興奮と萎んでいく期待を引き止めるべく、問いというより希望を口にした。

「もしかして、まだ真夜中じゃないとか？」

「でも、月はもう真ん中まで昇ってるわよ？」

「貴婦人が現れなきゃダメなんじゃないかしら？」

「まさか。だって、蓮の花が咲く季節の満月の真夜中って条件しか聞いたことないもの」

「ねえ、まさか、蓮の花が開いてないから条件満たしてないんじゃないか…」

「それこそ、まさかでしょ。蓮の花が開くのはだって、朝方よ？ 言い伝えは真夜中じゃない」

それぞれがそれぞれの希望を否定して、とうとうエマたちは沼を覗き込むのをやめた。

四人ともすっかり鼻白んでしまい、つい先ほどまで天上の景色のように思われた美しい風景さえ、ありふれたただの景色に思えた。

がっくりと肩を落として、ベラがシダの茂みの上に力なく座り込む。

後の三人もそれぞれ同じように、シダを絨毯にして、沼のほとりに座り込んだ。

「言い伝えは、出まかせだったのね」

沼を眺めながら、気落ちして言うベラに続いて、マリエッタがやや不満げに口を尖らせる。

「トーマスが正しかったってことになるのね。悔しい。あいつ絶対、勝ち誇った顔するわよ」

「癪に障るから、トーマスには見えなかったこと黙っておきましょうよ」

「そうね、それがいいわ。何を聞かれても、意味ありげににやにや笑うだけで、何も答えないでいませよ」

エマとリーシャが口々に言い、ベラとマリエッタも同意するように肩を軽く竦めて返した。

それからまた少しの間、沈黙が四人の上に覆い被さったが、ぷつんと近くの草をちぎりながら、リーシャがその沈黙を押しやった。

「せっかくここまで来たのにね」

「やめて、リーシャ。これ以上虚しくなるようなこと言わないで」

至極残念そうに呟いたリーシャに、ベラが耳を塞ぎ、後ろ向きに倒れるようにシダの上に横たわる。

「服が汚れるわよ、ベラ」

「大丈夫よ、ここは乾いてるもの」

投げやりに言って返すベラに、エマは小さく息をつくど、気を取り直すように沼の方に目を向けた。

「でも、運命の相手の顔が見えなかったのは残念だけど、来て良かった面もあるじゃない。ここは本当に綺麗だわ」

「そうね、夜の沼がこんなに綺麗だとは思わなかった」

「幽霊もいなかったしね。怖がりさんは、さぞ安心したんじゃない？」

同意してしみじみとした声をあげたリーシャに、マリエッタが少し意地悪を言う。

むっとしたリーシャがそれに対して草を投げつけて、マリエッタが投げ返し、それがベラに当たって、ベラが投げたのがエマに当たって、その草投げの応戦に誰からともなく笑い声が漏れ、ようやく四人の顔にいつもの笑みが戻った。

「ねえ、もし運命の相手が見えていたとしたら、どんな顔が良かった？」

寝転んだまま、地面に肘をたてて頭を支えながら、ベラがそれぞれを見て問いかける。

一番に答えたのは、マリエッタだった。

「私は茶褐色の髪に、謎めいた鳶色の目をした人がいいな。鼻はすっとしてて、口元にはいつも、どこか憂いを含んだ渋い笑みを浮かべていたら、申し分ないわ」

「私は、そうね。目は薄い氷のような綺麗なブルーで、唇は優しい微笑みの形をしていて、髪は金か黒で、縮れているのがいいわ」

マリエッタに続き、リーシャが考え考えと言った様子で答える。

ベラは相変わらず寝転んだまま、それを聞きながら、自分もまた理想を述べた。

「私は鷹鼻でギョロ目じゃなければ、後は何でもいいわ。出来たら背が高い人の方がいいけれど。エマ、あんたは？」

「私は……」

エマは、三人の視線を一身に受けて、少し口ごもった。

しかし、意を決するように口元を一度引き締めると、思い切って言った。

「白状するけど、私、本当はよく分からないの。今までみんなが話すのを分かるような顔して聞いていたけど、本当は私、男の子を見て、ハンサムだとかチャーミングだとか思ったこと一度もないのよ。だから、どんな顔がいいとか分からないわ」

エマの告白に、マリエッタがちょっと驚いたような顔で、村で一番器量良しだと言われている、ふたつ年上の少年の名をあげる。

「ケント・ブライトンは？ 彼を見てもハンサムだと思わない？」

「だって、あの人、教会の教室に来てた頃、ルーシー・フォットとダイアナ・ベンガーをいつも両天秤にかけて面白がってたじゃない。あの方は私、ちっともハンサムだと思えない。なんでルーシーとダイアナがあんなにあの人にのぼせ上がっているのか、いまだに分からないわ」

「エマは誠実な人がいいわけね」

ベラが納得顔で言う。エマはそれに対し、頷きながらも、思案顔でやや首を傾げた。

「それはもちろん、そうだけど。でも、いくら誠実な人でも、体中おできだらけで歯は全部虫歯で、物凄く肥えて脂ぎった、暑くもないのにいつも汗だらだらで嫌な臭いがする人と結婚するのを想像すると、ちょっと嫌な気もするわ。でもだからって、ケント・ブライトンみたいな人をつかこいとも思えないし。というか、それ以前に私、男の子にのぼせ上がって馬鹿な真似をしたり、その人のこと一日中考えて何も手につかないとか、そういう気持ちがよく分からないのよ」

言い切って、エマは友人たちを見回し、尋ねた。

「誰か、恋をしたことある？」

しかし、尋ねるまでもなく、答えは分かっていた。同じ村で同じ年に生まれ、女の子同士ずっと同じように育ってきたのだ。誰もみんな、真面目な顔で首を横に振って返した。

「どんな気持ちなのかしら。恋って。私、ちゃんと分かる日がくるのかしら」

悩むように顔を俯けて、そうぽつりと零したエマに、ベラが優しく言う。

「大丈夫よ。心配しなくてもきっと、運命の人が現れれば、必然的にその人と恋に落ちるようになっているはずよ。女神様はそのために男と女をお作りになったんだもの」

ベラに大きく頷いて、マリエッタが夢見るような顔つきで両手を組み合わせた。

「そうよ。世界のどこかに必ずいるのよ、自分だけの運命の人が。そう考えると、ドキドキしてこない？ 私、恋をしたことはないけど、たまに想像してみるの。きっと相手のこと考えるだけで、胸が燃えるような想いがして、心が切り刻まれるように切なくもなるのよ。私だけじゃなくて、相手の人もね。だから、一秒たりとももう離れていられなくなるのよ。ロマンチックだわ」

マリエッタは宙を見て熱っぽい目で語る。

一方、リーシャは近くの草を悪戯にちぎりながら、言った。

「もっと穏やかなものもあるんじゃないかしら。ミシェル姉さんがお嫁に行く前に話してくれたことがあるんだけど、嫌なことがあっても、その人が同じ空の下にいるって思うだけで、満たされた優しい気持ちで一日過ごせるんだって。それを聞いたとき、私もそういう恋がしたいなって思ったわ」

「それ、素敵ね。深い信頼で固く結ばれてる二人って感じ。ああ、でも、私はやっぱり、胸を焦がすような命懸けの大恋愛をしたいわ。沼の貴婦人みたいな」

リーシャの意見に賛同しつつも、マリエッタが身を振るようにして憧れの眼差しを沼に向ける。

その様子に、ベラが呆れた声をあげた。

「やあね、マリエッタ。あんた、悲しい恋がしたいの？」

「あら。悲恋だからこそ、ロマンチックなんじゃない」

「やめてよ、マリエッタ。あんたがそんな悲しい恋をして死んでしまったりしたら、私、悲しくて一生笑えなくなるわ」

リーシャが本当に悲しそうな顔をして、マリエッタが明るく苦笑する。

「例え話よ、例え話。でも、すごく憧れるのは本当ね。そういう恋に」

エマは黙って友人たちの話に耳を傾けていたが、今一度友人たちの顔を見回してから、口を開いた。

「私はやっぱり、分からないわ。燃えるような恋も、穏やかな恋も、悲しい恋も、物語なら想像することは出来るけど、自分をヒロインに持ってくると一瞬でダメになっちゃう。ねえ、もし私が誰とも結婚しないままオールドミスになっても、ずっと友達でいてくれる？」

「当たり前じゃない」

すぐにリーシャがエマの手を握って答えた。その優しさにエマが微笑む傍から、ベラも思慮深い面持ちで言う。

「よく、男女の仲は明後日にはどうなるか分からないって言うじゃない？ そういうのもスリリングでいいのかなってちょっと思うけど、でも、友情は別だわ。私たちの友情は永遠なもの。たとえ、どんなに素敵な運命の相手が現れたって、あんたたちは私の永遠の特別よ」

「そうね。それは私も強く思うわ」

真面目な顔で、マリエッタが頷く。

ベラは澄ました顔で、悪戯っぽく目を尖らせた。

「悲恋で死にたいって言った人が、何言ってるの。あんたは友情より大恋愛を取るんでしょ」

マリエッタは憤慨したように、目を大きくした。

「死にたいって言ったわけじゃないわ。そういう大恋愛をしてみたいって言っただけよ」

そして口を窄めると、幼い子供のような顔で友人たちの顔を覗き込むようにして、続けた。

「でも、たとえそれくらい好きな人が出来たとしても、あんたたちは、それとはまた別の特別なもの。一番好きなのは、いつだってあんたたちよ」

その表情と言葉に、エマもリーシャもベラも、笑顔を見せずにはいられなかった。マリエッタも笑った。みんな、同じ気持ちだったからだ。

顔も知らない運命の相手より、ずっと姉妹のように育ってきた友人のほうが、この先の人生において永遠に、何が起こってもずっと一番だと、まだ恋の意味も、永遠の意味も知らないエマたちは、純粋に言い切ることが出来た。

ひとしきり微笑みあった後で、リーシャがぽんと手を打ち合わせて、明るい声を響かせた。
「ねえ、良いこと考えたわ。大人になって、四人のうちの誰かが恋をして結婚することになったら、またみんなでここに来ない？ そして、みんなで運命の恋の話をしましょうよ。今夜のことを思い出しながら」
「いいわね、それ！」
「素敵！」
「楽しそう！」

ベラが起き上がって賛成し、マリエッタは目を輝かせて賛成し、エマも心躍らせて賛成した。
「みんな異論はないわね。じゃあ、指切り」
取り仕切るようにベラが言って、四本の細い小指が絡まりあう。
月は既に中天から幾分か西に降りて、そんな少女たちの姿を沼と一緒に優しく照らしていた。
カエルは相変わらずあちこちで間延びした声を響かせ、銀の羽を持つ虫たちは、夜の帳に沈む沼の上を楽しげに飛び交い、布袋葵も蓮の花も、まだ花開くには至らぬものの、美しい色彩をそこに加えている。
不意に遙か上空で、薄雲が月影を微かに遮った。
そしてまた、夜を渡る風が、それを払った。
その束の間に、沼の中央の一際見事な蓮の葉のあたりで、ほっそりした白い靄のようなものが一瞬浮かんで風もなく揺れたが、それぞれの未来と、そこに出来た新たな約束に胸いっぱい少女たちは、誰もそれに気付かなかった。

(了)

沼の貴婦人 ～ロドリー村より～
<http://p.booklog.jp/book/96842>

著者: 浜田 薫

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/nococococo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/96842>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/96842>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社: 株式会社ブクログ